

氏名	篠 田 美 紀
学 位 の 種 類	博 士 ( 学 術 )
学 位 記 番 号	第 3885 号
学位授与年月日	平成12年12月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	痴呆性高齢者の心理に関する発達臨床心理学的研究 ーロールシャッハ・テストからみた自我機能の発達の考察ー
論文審査委員	主 査 教 授 松島 恭子      副主査 教 授 岩堂美智子 副主査 教 授 白澤 政和

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は痴呆性高齢者の自我機能を 1) 臨床心理学的技法 (ロールシャッハ・テスト; 投影法人格検査) によって明らかにするとともに、2) 人間の心理的発達において、どのように位置づけられるかを高齢期発達臨床心理学の立場から検討することを目的としている。

序章では、高齢期研究の質的転換の重要性について述べた。高齢者の心理理解の方法論と援助技法を臨床心理学的に求めた発達臨床心理学の立場から、援助体制の形成、援助技術の発展へと寄与する独自の学問体系を「高齢期発達臨床心理学」として位置づけることを提唱した。

第 1 部 (第 1 章～第 5 章) の文献研究においては、高齢期の心理学研究・痴呆研究・痴呆性高齢者に関する臨床心理学的研究について、それぞれの分野の先行研究を検討した。その結果、痴呆性高齢者の心理的援助技法は確立されておらず、心理アセスメント技法による実証的な研究報告が非常に少ないことを問題点として取り上げた。主体 (個人) と客体 (環境) との関係のあり方が露呈されるロールシャッハ・テストでは、特に主体の現実との関係性 (本論文ではこれを自我機能と定義する) を理解する場合に役立つと考えられたが、本テストによる痴呆性高齢者の研究はこれまで稀有であった。

第 2 部 (第 6 章～第 12 章) では調査研究を総括した。その結果、1) 痴呆性高齢者には現実検討能力の低下や統合的な判断能力の低下が認められ、この点で正常高齢者とは異なる自我機能の状態にあることが理解された。しかし、2) 主観的な現実体験の能力と、人に対する興味や関心はなお保持されていることが明らかとなった。これらの特徴を心理的発達の観点から検討した結果、3) 状況判断の様式に限っては、より早期の発達段階、つまり、幼児の状況判断の様式に一致した。一方、4) 痴呆性高齢者に保持されていた主観的な現実体験の能力や人に対する興味や関心は正常高齢者の特徴と一致しており、この点が痴呆性高齢者と正常高齢者に共通する高齢期の心理的発達の特徴であると考えられた。

これらの結果から、痴呆性高齢者の心理的特徴の独自性が明確になると同時に、痴呆性高齢者への臨床心理学的援助の必要性和可能性が実証的に示唆された。すなわち、臨床現場においては、援助の基本的姿勢として高齢期特有の現実体験様式を尊重する姿勢が必要である。この援助の基本姿勢に加えて、痴呆に伴う現実検討能力の低下や統合的な判断能力の低下に対し、発達水準を考慮した援助が必要であると考えられる。さらに、痴呆性高齢者の人に対する関心の強さを考慮すれば、これらの援助が人によって行われることこそ、痴呆性高齢者の心理的援助に極めて重要であることを指摘した。これらの見解は、痴呆性高齢者のケアの実際において、一つの方向性を提示するものと考えられた。

## 論文審査の結果の要旨

高齢者の心理諸特性に関する従来の研究においては、加齢による発達的变化と器質障害による諸行動の変容とが明確に評価・峻別されないまま、「能力低下」などの表現をもってその心理を表現する傾向がみられた。

本論文では第1部においてこうした先行研究の問題点を整理した上で、心理テストおよび精神医学的診断により対象高齢者の属性を厳密に確定し、高齢者の自我機能の発達の検討という新たな視点を加えて、独自の実証的研究を行ったところに意義が認められる。

さらに、ロールシャッハ・テスト（人格検査、投影法）を用いて精神内界のアプローチを行っている点が、本研究の方法論上の斬新な点といえる。とりわけ、アルツハイマー型痴呆および脳血管性型痴呆という重度の痴呆高齢者を対象としたロールシャッハ・テスト研究は、従来の研究において散見されるにすぎず、本研究がこうした研究領域における開拓的実践研究という点が評価される。

第2部の縦断的・横断的調査研究においては、痴呆性高齢者の自我機能特徴を探る目的で、正常高齢者および幼児との比較検討がなされた。調査の結果、一般に、痴呆性高齢者が示す「現実吟味能力の低下」という現象の裏側に、実は極めて鮮明な「人間反応」能力の存在することが明らかとなった。これまで往々にして了解不能と解釈されがちであった痴呆性高齢者の心理における「主観性」や「主体性」の能力の残存とその臨床的活用の可能性が、本研究においてはじめて実証的されたことは特筆すべき点である。また、一般にいう「幼児返り」とは一線を画す高齢期の心理的変容について実証的研究結果が得られた点も評価しうる。

以上の結果から、本論文の研究結果は臨床心理学および発達心理学の長年の論争に実証的データによって一石を投じたと共に、「高齢期発達臨床心理学」という独自の学問分野を開拓した点において、学問的に非常に重要な成果をなしとげたものと評価できる。よって本論文は博士（学術）の学位を授与されるに値すると認められる。